

A. ベストゥージェフ＝マルリンスキイとその小説

—— 1830年代のロシア作家達より

金 沢 美知子

1830年代は、ロシアの散文芸術を研究する上で極めて重要な時期であると言わねばならない。それは、小説が詩を押し、文学に於ける支配的なジャンルとして君臨し始めた時期である。と同時に、四十年代の「自然派」の抬頭を機に十九世紀後半に黄金時代を迎えるロシア散文芸術の、いわば胎動期でもあった。三十年代はロマン主義からリアリズムへの過渡期であって、種々の思潮や傾向の混淆と消長が見られ、そのことによってまた、興味深い一時期となり得ているのである。

プーシキン、ゴーゴリ、レールモントフがこの三十年代に相継いで散文作品を発表し、ロシア・リアリズム文学の礎を築いたことはよく知られている。一方、本稿でとり上げる A.A. ベストゥージェフ＝マルリンスキイは、この三つの巨星の光芒に霞んで、今日ではロシア文学史の型通りの一角を占めるに過ぎない。しかしながら、彼の存在は、1830年代のロシア文学を考察する際に看過することができないのである。まず、彼は既に1820年代に三者に先駆けて小説というジャンルの開拓に取り組み、しかも彼らに少なからぬ示唆を与えた。次に、読書への大衆の関心を高め、市民文化の中に小説を定着させた。更に、彼の文学は様々な矛盾を擁しつつも、1830年代のロシアの最も顕著な文学的傾向のひとつを代表していると言えよう。

このような諸点を考え合わせて、本稿に於て筆者はこれまで顧慮されることの少なかったマルリンスキイの文学を取り上げ、その紹介に加えて、彼の三十年代の小説を中心に若干の考察を試みた。⁽¹⁾⁽²⁾

I A.A. ベストゥージェフ

1. 生涯

1797年、アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ・ベストゥージェフは進歩的な貴族階級の家系に生を受けた。彼の父親 A.Φ. ベストゥージェフは民主主義的な思想を信奉する文筆家で、十九世紀初頭には多くの教育学上の著作で知られた人である。その子供達も又、各々芸術的な天分を具えていたが、五人の息子のうち、アレクサンドルを含む四人がデカブリストとして1825年の蜂起に参加している。⁽³⁾ このことからアレクサンドル・ベストゥージェフの育った家庭環境が偲ばれるが、果して彼は若年より多くの書物を読破し、九才で既に戯曲《Очарованный

лес》を創作したと言う。彼は1816年以後近衛竜騎兵連隊で勤務に就いており、後述する彼の筆名マルリンスキイは、この時の彼の滞在地マルリ（連隊の当時の駐屯地ペテルゴフの近隣）に因んだものとされている。若くして始まったA. ベストゥージェフの文学活動は、1822年のK. リーレーエフとの出会いを契機に新たな進展を見せることになった。即ち、彼はリーレーエフと共同で雑誌「北極星」(1823～1825)を刊行し、そこに創作と批評を発表して、自由主義の思想を唱導したのである。彼は1825年12月14日のデカブリストの乱に参加したものの、乱の挫折を逸早く見抜き、その夜街を彷徨した挙句、翌夕に自首して獄に繋がれた。投獄の後、シベリア流刑を経て彼はコーカサスで軍役に就くが、この間に再び文筆活動を開始し、当時差障りのあったデカブリスト詩人A. ベストゥージェフの名に代わる筆名マルリンスキイを用いて、

数々の小説を発表したのである。シベリア、コーカサスを扱ったオーチェルク風の作品や社交会の物語等、マルリンスキイの名で発表されたこれらの小説は、当時の読者から熱狂的に迎えられ、1830年代のロシアにマルリンスキイ旋風を起こすことになった。晩年の彼は深い孤独と憂愁に因われ、又、1837年のプーシキン⁽¹⁾の訃報に接して大きな衝撃を受けたと言われているが、その彼も又、同年プーシキンの後を追うようにして、山民との接戦で不帰の人となった。

2. 作品と研究

デカブリストであったことも原因してか、十九世紀にはA. ベストウージェフに関する本格的な研究は現われなかった。今世紀初頭(1907年)になって最初の著書がH. Котляревскийによって編まれたが、これは豊富な資料を渉猟してA. ベストウージェフの伝記的側面に照明を当てており、更にこの作家に積極的な意義を見い出そうとしたもので、ベストウージェフ研究史に於ける画期的な第一歩となったのである。この書に続いて、A. ベストウージェフと他作家(プーシキン、カラムジン等)の関係を論じたものも現われる。その中で、1937年(没後百年記念)のマルリンスキイ作品集の刊行は彼に関する研究を促進する引金となり、その後今日に至るまで数回に亘って選集が公刊され、少ないながらも幾つかの研究が発表されている。⁽⁴⁾

A. ベストウージェフの研究は、デカブリストとしての彼の生涯と思想の解明に発し、徐々にその文学の領域にまで進展してきた。とは言え、二流作家としての彼のイメージは依然として根強く、又、大半の研究が<A. ベストウージェフ即ちロマン主義の代表者>という一面的な見解のうちに留まっている。ただ、1973年に出版されたФ. Кануноваの著作は、主として小説家ベストウージェフを考察の対象とし、彼の散文作品の中にロマン主義的な要素と共にリアリズムの萌芽を見出さんとする、意欲的な研究であると言えよう。と同時に、種々の問題点(必ずしもそれらの全てに具体的な解決が与えられているわけではない)を提示しているこの論文は、1830年代~1840年代のロシア文学全体との関わりに於て、A. ベストウージェフの創作技法の研究はまだ緒についたばかりであるという印象をも与えるのである。筆者は Кануноваの著書に啓発され、A. ベストウージェフ=マルリンスキイの文学の特質のひとつをその心理主義の中に認めて、次節では彼の小説の技法をこの視点から検討した。⁽⁵⁾

II マルリンスキイの創作技法

1. 小説家ベストウージェフ=マルリンスキイ

A. ベストウージェフの文筆活動は批評と創作の二つの領域に亘っている。彼はロマン主義の熱烈な擁護者であって、自らの批評に於ては、終始ロシア文学の民族的独自性を主張し、平易な母国語による市民文学の養成を唱えた。彼はこのような観点から、それ以前の、及び同時代のロシア文学の再評価を行ない、ロシア十九世紀の批評史に於ける先駆者的役割を果たしたのである。⁽⁶⁾ それに対して、彼の創作は、デカブリストA. ベストウージェフの名に密接に結びついた詩作品と、1830年代にマルリンスキイの筆名で発表されたものを中心とする散文作品とから成り立っている。⁽⁷⁾ A. ベストウージェフの詩は自由と政治的解放の思想を如実に反映しており、その点からしても他のデカブリスト詩人の作品と同工異曲である。と同時に、従来の方の批評にある通り、彼の詩人としての技倆と才能が、K. リレーエフやA.H. オドエフスキイ(共にデカブリスト詩人)に比して生彩を欠いているのは如何ともし難い。即ち、彼の創作家としての真価は

何にもまして小説のジャンルに於て発揮されたのであり、時代の寵児たり得たのも小説家としてのA. ベストゥージェフであったと言えよう。

マルリンスキイ（以下の叙述ではこの作家の名を筆名マルリンスキイに統一し、煩雑を避けることにする）の小説は、1820年代のものと1830年代のものに大きく二分することができる。

第一のグループに含まれるのは、処女作とされている《Поездка в Ревель》

（1821）以後、事実上1825年の蜂起の頃までに執筆された諸作品であって、ノブゴロドの物語《Роман и Ольга》やリヴォニア物語群《Замок Венден》《Замок Нейгаузен》等、主として中世に取材した歴史小説である。ロマン主義的な色彩の濃い、愛と冒険の物語、戦いの物語を扱ったこれらの作品の中で、作者は歴史に背景を借りて現代の国政を批判し、自由解放の思想を宣揚している⁽⁸⁾。

それに比して、第二のグループ、即ち1830年代の作品では、このような高揚とした気分や啓蒙的な調子が和らいでいる。デカブリストの乱挫折後も、マルリンスキイの人間に対する信頼と自己の思想に対する確信は基本的には変わらなかったが、その作品はそれまでとはかなり異なった様相を呈し始めるのである。そこには外面的な特徴として、

① 物語の舞台が現代に移行している。《Старинная повесть》は後退し、史実を題材とする場合でも、近接過去の事件が選ばれている。

② 史実に依存せず、全くの虚構によってプロットの構成されている作品が増加している。

③ 自伝的な調子が強まっている。

点が認められる。以上の諸点は、テーマ別に眺めた時、マルリンスキイの三十年代の作品の大半が社交会の物語とコーカサス・シリーズで占められているという事実に符号するであろう。これらの作品——体験が自伝風に綴られているコーカサス^{オーチエルク}印象記も、人間関係が織り成す愛と苦悩を扱った社交会の物語も——に於ては、主人公の個人的なドラマや内面世界を描写することが主眼となっているからである。マルリンスキイの作家としての眼差は、いまや歴史自体ではなく、日常生活に於ける私的小世界と人間の自我の問題へ注がれており、彼の関心は人間の歓喜と絶望の描写へと移っているのである。そして、個としての人間を追求した点で、マルリンスキイの小説は、三十年代の文学の中でもレールモントフのそれと並んで際立った存在となり得たのであり、彼の文学の意味も又、この心理描写、心理主義との関わりの中にあることができるであろう。以下、この作家の心理描写の手法に論を進めることになるが、その際に筆者は、この手法が最も顕著に認められる作品のひとつ『恐ろしき占い』を、具体的な考察の対象として選んだ。

2. 『恐ろしき占い』、その1

『恐ろしき占い』（《Страшное гаданье》）は1830年にダゲスタンで制作され、翌31年に「モスクワ電信」（Московский телеграф）にアレクサンドル・マルリンスキイの署名で発表された。社交会を扱った物語のひとつであるこの作品は、規模としてはさほど大きくはない（やや短い中編）が、主人公の内面をドラマティックに描出した秀作であると言えよう。Я бы тогда влюблен で始まるこの物語は、社交会の貴婦人ポリーナ（仮称）に対する主人公＝語り手の愛の苦悩を中心に構成されている。主人公は一度は夫ある身のポリーナと別れはしたものの、自らの恋を諦めきれず、ある晩彼女が出席することになっている夜会へと赴く決意をする。会場へと馬を駆っていた彼は途中で道に迷い、巡り会った民家でひと時を過ごす破目に陥るのであるが、この民家で夜の集いに闖入した奇怪な男 незнакомец は、後

に主人公の運命を左右する重要な役割を果たすことになる。やがて、主人公は村人のひとりに誘われて自分の運命を占う為に墓地へ出掛け、そこで占いの最中に意識を失って、現実と見紛うばかりの生ま生ましい悪夢を体験する。即ち、夢の中で、彼はかの *незнакомец* に唆されてポリーナと恋の逃亡を企て、二人を追ってきた彼女の夫を殺害するのである。ポリーナは半ば狂人と化し、彼自身は血に穢されて絶望の淵に立たされ、そしてその時にこの悪夢は醒める。

では、作者マルリンスキイの心理描写への関心、心理主義の傾向は、この作品のどのような点に顕著に認められるであろうか。

① 主人公の性格

主人公は、自己の内面及び自己と他者・世界の関わりに多大な関心を持つ人間である。彼は屢屢夢想に耽けるが、同時に、夢想と夢想家を分析し批評する冷厳な目をも具えている。マルリンスキイの小説に頻りに登場するこのような主人公の性格は、作中人物達の内的な営みが読者の眼前に披瀝されるための大きな要因となっている。

② 一人称の叙述形式

『恐ろしき占い』に限らず、マルリンスキイの多くの作品が一人称で叙述されている。（《*Замок венден*》《*Вечер на бивуаке*》《*Письмо к доктору Эрману*》《*Латник*》《*Он был убит*》等。）更に、一人称叙述、三人称叙述の作品の孰れに於ても、書簡、日記等の一人称で記された文面が様々な形で取り込まれており、記述者の告白が作品全体にとっての重要な役割を担っている。このような叙述形式はマルリンスキイの初期作品以来の特徴であって、これが自伝風な語り口を持つコーカサス・シリーズに至るまで連綿と続いているのである。

③ 対話による心理描写

対話の場面が主人公の心理描写に大きく関与している⁽⁹⁾。即ち、恋人ポリーナに対する主人公の欲望と、それを抑圧せんとして味わう苦悩は、まず、他ならぬポリーナとの対話の中に現われる。第二に、主人公の心理的動揺は、彼とその分身的存在である *незнакомец* との深夜の奇怪な問答の中で、より深く探られる。第三に、彼の懊悩は彼自身の内的対話を通して浮き彫りにされるのである。こうして、対話は、心理描写の方法として、種々の角度からその可能性を試されている⁽¹⁰⁾と言えよう。

3. 『恐ろしき占い』, その2

上述のような形で『恐ろしき占い』に導入された心理描写は、更に以下の特徴を有している。

(1) この心理描写のひとつの重要な側面は、それが、孤立した形而上的な領域に向けられるのではなく、肉体の描写と不可分に結びついていることである。人間の喜怒哀楽——とりわけ恋愛感情——は、頭、頭髮、顔、額、目、眉、鼻、鼻孔、口、唇、肩、胸、四肢への言及や、これら肉体の各所に纏わる種々の現象——汗、涙、血、体熱、息吹、嘆息、喘ぎ等——の描写を通して表現される。

例1 Не умею описать, что со мною случилось, когда, обвивая тонкий стан ее рукою, трепетною от наслаждения, я помчался другой ее прелестную ручку; казалось, кожа перчаток приняла жизнь, передавая биение каждой фибры ... казалось, весь состав Полины прыщет искрами! Когда помчались мы в бешеном вальсе, ее летающие, душистые локоны касались иногда губ моих; я вдыхал аро-

матный пламень ее дыхания; мои блуждающие взгляды
 проносили сквозь дымку, - я видел, как бурно вздыма-
 лись и опадали белоснежные полушары, волнуемые моими
 вздохами, видел, как пылали щеки ее моим жаром, ви-
 дел - нет; я ничего не видал ... пол исчезал под ногами;
 казалось, я лечу, лечу, лечу по воздуху, с сладостным за-
 миранием сердца! Впервые забыл я приличия света и са-
 мого себя. Сидя подле Полины в кругу котильона, я
 мечтал, что нас только двое в пространстве; все прочее
 представлялось мне слитно, как облака, раздуваемые вет-
 ром; ум мой крутился в пламенном вихре.⁽¹¹⁾

マルリンスキイの文学にあっては、常に、人間の精神にとっての肉体の意味が強調されている。彼の心理描写は、観念性を免れて、官能的な匂いを発散させつつ、その強烈な具象性と生々しい現実感覚で読者を捉えて離さない。⁽¹²⁾ここで、彼の作品から更にひとつ例を引いておこう。

例2. Кто знает, любовь или гнев волновали его душу, когда
 лицо его то пылало кровью, то вновь тускнело, как булат?
 Кто знает, гордость ли воздымала так высоко его брови,
 презрение ли двигало его уста? Высокие ль думы или
 тяжкое преступление провело морщины на челе?⁽¹³⁾

(2) 心理描写のもうひとつの特徴は、自然との密接な繋がりの中に認められる。『恐ろしき占い』は社交会の恋愛を扱った作品ではあるが、主人公＝語り手の行為が社交会のみを背景としているわけではない。主人公が自然と交感する場面も又、物語の重要な部分を成している。

例3. Мы брели целиком, в сугробах выше колена. На беду,
 нашу небо задернуто было пеленою, сквозь которую тихо
 сеялся пушистый иней; не видя месяца, нельзя было
 узнать, где восток и где запад. Обманчивый отблеск,
 между перелесками, заманивал нас то вправо, то влево...
 Вот-вот, думаешь, видна дорога.... Доходишь - это склон
 оврага или тень какого-нибудь дерева! Одни птичьи и
 заячьи следы плелись таинственными узлами по снегу.⁽¹⁴⁾

マルリンスキイの小説の主人公達は、屢々、自然の中で過去を顧み、未来を感じとり、嘆き、そして悟る。晩年のコーカサス物語群に至っては、主人公はいわばコーカサスの自然と渾然一体化している。

又、自然そのものが背景となっていない場合にも、時として、主人公の挙動や内面の動きは自然と対比して描かれている。マルリンスキイの文体は簡潔さとは程遠い装飾的なもので（装飾性の原因のひとつは比喻であるが）、そこには種々の自然現象による比喻が数多く認められる。

例4. И ярче, каждый миг ярче растекается по небу эта лучезарная капля, блещет, зажигает небосклон, объемлет и пронзает землю лучами, топит ее в волнах тепла и света. Так взошла в моей душе роковая звезда этой страсти, не слышимая, чуть видная при восходе, светлая и пламенная потом. Теперь стоит она на своем бестенном полудне, и никогда, никогда не сойдет она с полудня. Одна смерть будет ее вечером; ее закат - могила; ее могила - вечность.⁽¹⁵⁾

主人公の内面世界は自然と融和し、自然と二重写しになる。そこには、語り手と作中人物達の自然に対する憧憬が否応なく滲出している。彼らにあって、自然への愛は神への愛にも等しく、人間への愛にも繋がるものである。⁽¹⁶⁾ 例えば、《 Он был убит 》の主人公は、「こよなく愛しいコーカサス、愛しい我が祖国、愛しいおまえ、リリアよ、——何というこの愛しさ⁽¹⁷⁾！」と、日記に自分の思いを書き記している。こうして、人間の精神はとりわけ自然というモチーフによって美化されており、読者はそこに作家マルリンスキイの理想主義の一端を窺い知るであろう。

* * * * *

それでは主人公の内面世界は、いかなる視点から主題化され、物語化されているであろうか。

まず、『恐ろしき占い』に於て、心理描写の主眼は、人間の粗野さに照明を当てることにある。主人公の内的営みは往々にして、烈しい愛欲や、恍惚及び絶望の感情として捉えられている。(例1, 例5)

例5.

До сих пор, когда я вспомню об уверении, что я любим, каждая жилка во мне трепещет, как струна, и если наслаждения земного блаженства могут быть выражены звуками, то, конечно, звуками подобными! Когда я прильнул в первый раз своими устами к руке ее, — душа моя исчезла в этом прикосновении! Мне чудилось, будто я претворился в молнию: так быстро, так воздушно, так пылко было чувство это, если это можно назвать чувством.⁽¹⁸⁾

次いで、この粗野な自我^{エゴ}を抑圧し、懐柔することが物語の主題となっている。主人公はポリーナへの激しい思慕の情に翻弄されながらも、一方ではそれに抗い、戦慄すべき悪夢に啓示を受けて、姦通と殺人の罪を辛うじて免れるのである。⁽¹⁹⁾

マルリンスキイは様々な設定でこのテーマ——粗野な自我とその陶冶——を追求した。それは、自由と解放を希求しつつ、同時に、己れの存在と生の呪縛を克服せんと願う、新しい世代についての物語であり、新しい形での問題提示であったと言えよう。当時、マルリンスキイの小説が愛読され、彼の名が多く読者から崇拜されたのは、ひとつには、作品に現われる個としての人間についてのこうした尖鋭な問題意識の故であったろうし、又、それが先述した二つの顕著な傾向——物語が強烈な現実感覚に裏づけられていたことと、読者の精神を高揚させ、同時に物語全体に楽観的な色彩を与えるイデアリズムの匂いを発散していたこと——を有していた為であったと、考えられるのである。

Ⅲ マルリンスキイの時代とマルリンスキイの遺産 —— マルリンスキイとドストエフスキイ

1830年代にマルリンスキイの小説は極めて多くの読者を得ていた。しかも、それが一般の読者大衆のみならず、作家・批評家等、文学の専門家達からも歓迎されていたことを忘れてはなるまい。今日、我々はツルゲーネフの回想やベリンスキイの評論を通して、当時のこうした状況を窺い知ることができよう。⁽²⁰⁾ ベリンスキイは1840年の評論『A. マルリンスキイ全集』で、マルリンスキイの小説を酷評し、ロシア文学史に於ける今日のこの作家の位置を決定せしめた張本人であるが、他ならぬその彼までもが、1830年半ばにはマルリンスキイを高く評価していた。この時期のベリンスキイは、「ロシア文学界には真の逸材が少ないが、その中で、マルリンスキイ

の才能は、言うまでもなく、極めて注目すべき現象である⁽²¹⁾、「マルリンスキイは我国の最初の小説家であり……、作家であり、あるいはロシア小説の首唱者であると言えよう⁽²²⁾」と公言して憚らなかったのである。しかしながら、このマルリンスキイ熱は三十年代末に鎮まり、かわって1840年代にはゴゴリを始祖とする「自然派」が抬頭することになる。三十年代から四十年代にかけてのこのような文壇の趨勢の中でのマルリンスキイ文学の行方を探ることは、困難ではあるが極めて重要な作業であろう。ここでは、作業の一環として、1840年代半ばに登場した、新しいロシア文学の旗手⁽²³⁾ Φ.М.ドストエフスキイの初期作品とマルリンスキイの小説を比較対照しておきたい。

マルリンスキイの小説とドストエフスキイの初期作品の間には類似点が少なくないが、両者の間のこのような同質性を最も敏感に感じとっていたのは、これもやはりマルリンスキイ文学の洗礼を受けたひとりであり、ドストエフスキイの初期の創作活動を注意深く見守っていた慧眼の同時代人、ベリンスキイであった。四十年代に書かれた彼の評論に於ては、

- ① フランスの熱狂派の文学に関する批評（例6）⁽²⁴⁾
- ② マルリンスキイの小説に関する批評（例7）
- ③ ドストエフスキイの初期作品に関する批評（例8、例9）

の三点が一体となって、彼の現代文学に対する見解の重要な部分を形作っている。

例6 ウジェニー・シューの小説に於て特に優れた所は何か？ — それは、現代の諸問題を最大に反映しているところの、現代社会の忠実な描写である。では、それらの小説の弱点は何か？ 読者に読む気を失わせる程に、小説を損っているのは何か？ — それは、誇張、メロドラマ的要素、効果、ロドルフ王女の如き前代未聞の性格であり、要するに、虚偽の臭いのする作り物めいた、不自然なもの全てである。……⁽²⁵⁾

例7 いったい、何時、何処に、このような言葉を話す人間がいるだろうか？ 果して、こんなものが本来の姿だろうか、現実だろうか？

こうして、ここには、性格、人物、形象、筋の蓋然性、状況の真実さというものが少しも見られないのである。⁽²⁶⁾

（『試煉』（《 Испытание 》）について）

例8 ……そして、ドストエフスキイ氏が、出来の悪くない部分を潔く切り捨てて、自作『分身』を三分の一だけでも縮めたならば、それはもっと成功した筈である。だが、この小説には他にもまだ致命的な欠陥がある。それは、その幼想的な色彩である。⁽²⁷⁾

（『分身』について）

例9 この小説全体を通じて、平明な活々した言葉や表現がひとつも見当たらない。全ては凝って、不自然で、作り物めいており、虚偽と欺瞞の臭いがするのである。⁽²⁸⁾

（『主婦』について）

ベリンスキイはこれらの批評の中で、あるひとつの文学的傾向に対して否定的評価を下している。彼が上記の三つの文学の中に等しく認めたのは、文体に関しては、レトリックの偏重——気

取った、簡潔さを欠いた装飾的な文体——であり、内容に関しては、主として、幻想性と過激さ——物語の不可解さ、非現実性、メロドラマの傾向——であった。彼は文学作品に於けるこのような要素の欠陥たることを指摘し、それに対立するものとして、簡潔と平明と自然を特徴とする「現実」についての文学、即ち自然派の文学の擁護へと論を進めるのである。「1847年のロシア文学観」の中で、ベリンスキイは半ば読者を啓発せんとして、こう述べる。

例10 まだ多少の価値を有しているこれらの作品の、主要な性質となっているのは何であろうか？——それは、誇張、メロドラマの要素、仰々しい効果である。我国に於けるこの⁽²⁹⁾傾向の代表者はマルリンスキイだけであり、ゴーゴリの影響はこの傾向を一掃したのである。

(『主婦』について)

そして、ベリンスキイは、「一掃」された筈の文学的傾向をドストエフスキイの作品の中にも認め、この作家に向かって繰り返し警告を発したのである。

ベリンスキイのマルリンスキイ＝ドストエフスキイ観は、自然派擁護の立場上多少誇張されている嫌いはあるにしても、両者の間に呼応する部分が多いことも否定し難い。この点を明らかにするために、ドストエフスキイの初期作品より二箇所を原文で引用し、先に示したマルリンスキイの小説(例1, 例2, 例5)との比較対照に供したい。

例11

А только теперь все эти впечатления—то утренние потрясли всё существование мое. Я прилягу. Мне, впрочем, покойно, очень покойно. Только душу ломит, и слышно там, в глубине, душа моя дрожит, трепещет, шевелится. Я приду к вам; а теперь я просто хмелен от всех ощущений этих... Бог видит всё, маточка вы моя, голубушка вы моя бесценная!⁽³⁰⁾

(《 Бедные люди 》より)

例12

Одежда его касалась ее одежды, и он слышал порывистое дыхание, вылетавшее из ее уст, шептавших горячую молитву. Черты лица ее по-прежнему были потрясены чувством беспредельной набожности, и слезы опять катились и сохли на горячих щеках ее, как будто омывая какое-нибудь страшное преступление. В том месте, где стояли они оба, было совершенно темно, и только по временам тусклое пламя лампы, колеблемое ветром, врывавшимся через отворенное узкое стекло окна, озаряло трепетным блеском лицо ее, которого каждая черта врезалась в память юноши, мutilа зрение его и глухою, нестерпимую болью надрывала его сердце. Но в этом мучении было свое исступленное упоение. Наконец он не мог выдержать; вся грудь его задрожала и изныла в одно мгновение в неведомо сладостном стремлении, и он, зарывав, склонился воспаленной головой своей на холодный помост церкви.⁽³¹⁾

(《 Хозяйка 》より)

確かに、物語の舞台背景や主人公の経歴等に於て、二つの文学の間には大きな隔りがある。にも拘らず、人間のファナティックな側面を好んで取り上げ、人間感情の荒々しさに熱筆を振るい、そこに個としての人間の実在性と物語の信憑性を確保せんとしている点で、ドストエフスキイの創作技法には、マルリンスキイ文学の残火が再び火勢を盛り返したとまで思わしめるものがあるであろう。

更に、両者には粗野な自我の陶冶という共通の主題があったことも見逃せない。又、マルリンスキイがフランスの熱狂派の中でも特にユゴーに心酔していたことと、ドストエフスキイがやはりユゴーの文学を別格視していたことを考え合わせることもよっても、両者の類縁性は傍証されるのではないだろうか。

* * * * *

その新鮮な魅力によって同時代人の広い共感を勝ち得たマルリンスキイの小説——これはある程度十九世紀初頭の西欧のロマン主義文学と軌を一にするものであろう——は、決して、等閑に付すべき文学現象ではなかった。それは、十九世紀のロシア文学が祖国の苦悩する精神を描いて実り豊かに開花するための、ひとつの重要な礎石となったのである。

注

(1) これまでに出版されたA.A. ベストゥージェフ＝マルリンスキイの全集、選集は以下の通りである。

- Основные издания сочинений А.А.Бестужев-Марлинского.
1. Русские повести и рассказы. ч. I-VIII, СПб., 1832-1834.
 2. Русские повести и рассказы А. Марлинского. ч. I-VIII, изд.2-е, СПб., 1835-1837.
 3. Русские повести и рассказы А. Марлинского. ч. I-XII, изд.3-е, СПб., 1838-1840.
 4. Второе полное собрание сочинений А. Марлинского. т. I-IV, СПб., 1847.
 5. А. Марлинский. Избранные повести. Л., 1937.
 6. А. Бестужев-Марлинский. Собрание стихотворений. Л., 1948.
 7. А.А. Бестужев-Марлинский. Сочинения в двух томах. М., 1958.
 8. А. Бестужев-Марлинский. Полное собрание стихотворений. Л., 1961.
 9. А.А. Бестужев-Марлинский. Повести и рассказы. М., 1976.
 10. А.А. Бестужев-Марлинский. Сочинения в двух томах. М., 1981.

筆者は本研究を行なうに当たり、1917年の革命以後に出版された選集（上記5, 6, 7, 8, 9, 10）のうち、小説作品が収められているもの、即ち5, 7, 9, 10を参照した。猶、本稿に於けるマルリンスキイの作品の引用は、全て、1958年刊の2巻選集（上記7）に依っている。（引用の際には *Марлинский*, 1958. と略記する。）

(2) A.A. ベストゥージェフ＝マルリンスキイに関する参考文献として、下記のものを用いた。

- ・ Котляревский Н. Декабристы. Кн. А.И. Одоевский и А.А. Бестужев-Марлинский. С.-Петербург, 1907.
- ・ Степанов Н.Л. Вступительная статья к кн.: А. Марлинский. Избранные повести. Л., 1937.
- ・ Литературное наследство. (т.60) Декабристы-литераторы. Книга первая и книга вторая. М., 1956.
- ・ Маслин Н.Н. Вступительная статья к кн.: А.А. Бестужев-Марлинский. Сочинения в двух томах. М., 1958.
- ・ Канунова Ф.З. Эстетика русской романтической повести. Томск, 1973.
- ・ Декабристы. Антология в двух томах. Составил Вл. Орлов. т.1. Л., 1975.
- ・ Капелюш Б.Н. Неизвестный текст А.А. Бестужева. В кн.: Литературное наследие декабристов. Л., 1975. стр. 290-294.
- ・ Левковиц Я.Л. К цензурной истории сочинений А.А. Бестужева. В кн.: Литературное наследие декабристов. Л., 1975. стр. 294-301.
- ・ Гусева Вл. И. Вступительная статья к кн.: А.А. Бестужев-Марлинский. Повести и рассказы. М., 1976.
- ・ Литературно-критические работы декабристов. М., 1978.
- ・ Сахаров В.И. Вступительная статья к кн.: Русская романтическая повесть. М., 1980.
- ・ Bagby, Lewis. *Aleksandr Bestuzev-Marlinskij's "Roman i Ol'ga": Generation and Degeneration.* «Slavic and East European Journal» Vol.25, No.4, 1981. pp.1-15.
- ・ Из литературного наследия А.А. Бестужев-Марлинского. Публикация Е.А. Тоддеса и А.Л. Осповата. «Известия Академии Наук СССР. (Серия литературы и языка)» том.40.№3, 1981. стр. 245-249.
- ・ Кулешов В.И. Вступительная статья к кн.: А.А. Бестужев-Марлинский. Сочинения в двух томах. М., 1981.
- ・ Мемуары декабристов. Северное общество. М., 1981.

(3) Бестужев-Марлинский家には五人の息子——ニコライ、アレクサンドル（即ちマルリンスキイ）、ミハイル、パーヴェル、ピョートル——と、三人の娘——エレナ、オリガ、マリア——がいた。五人の息子のうち、ニコライ、アレクサンドル、ミハイルがデカбриストであったことについては、研究者達の意見は一致している。しかし、末の二人、パーヴェルとピョートルの伝記には不詳な部分があるようで、出生の順序が定かでない。例えば、1958年刊の二巻選集はパーヴェルを末の息子とし、1981年刊の二巻選集はピョートルを末の息子としている。又、1825年の蜂起に参加した「四人の息子」の中に、年長の三人に加えて、ピョートルを含めるか、パーヴェルを含めるかという点でも、研究書によって見解が分かっている。

(4) А. Бестужев-Марлинскийの文学の研究の歴史については、Ф. Кануноваの著書で紹介されている。

См.: Канунова Ф.З. Эстетика русской романтической повести. Томск, 1973. стр. 3-7.

(5) А. Бестужев-Марлинскийの小説作品の外貌を明らかにする為、先述の四つの選集（注（1）を参照）に収められている小説作品の全てをここに挙げておく。

作 品 名	初出年度	作品の規模	備 考
Роман и Ольга	1823	C	
Замок Венден	1823	D	
Вечер на бивуаке	1823	D	
Второй вечер на бивуаке	1823	D	
Замок Нейгаузен	1824	D	
Подвиг Овечкина и Щербина за Кавказом	1825	D	
Ревельский турнир	1825	C	
Изменник	1825	D	
Замок Эйзен	1825	D	……初出時は《Кровь за кровь》という題名
Красное покрывало	1831	D	
Испытание	1830	B	……以下の作品に於ては Александр Марлинский 又は А.М. の署名が用いられている (一部、署名なし)
Вечер на Кавказских водах в 1824 году	1830	B	
Письмо к доктору Эрману	1831	D	
Страшное гаданье	1831	C	
Лейтенант Белезор	1831	B	
Аммалат-бек	1832	A	
Латник	1832	B	
Письма из Дагестана	1832	B	
Фрегат Надежда	1833	A	……
Прощание с Каспием	1834	D	
Путь до города Кубы	1836	D	
Горная дорога из Дагестана в Ширван через Кунакенты	1834	D	
Последняя станция к Старой Шамахе	1834	D	
Переезд от с. Топчи в Куткаши	1834	D	
Дорога от станции Алмалы до поста Мугансы	1835	D	
Он был убит	1835	B	……
Мореход Никитин	1834	C	
Мулла-Нур	1836	A	

「読書文庫」に、シリーズ『コーカサス・オーチェルク』として掲載される

猶、作品の規模は、ひとつの目安として記しておいた。(A=長編, B=中編, C=やや短い中編, D=短編)

- (6) 先駆者的役割を果たしたひとつの例としては、A. ベストウージェフが好んで用い、ロシア文学界に普及せしめた〈一年毎の文学観〉という批評形式がある。
- ◇「1823年度のロシア文学観」
- ◇「1824年及び1825年初めのロシア文学観」
- См.: В.Г. Белинский. Полн. собр. соч. АН СССР, М., 1953-1959.
т. IV, стр. 29-35.
- (7) 時として誤解を招いているようであるが、一部の小説はA. ベストウージェフ又はA. Б. の署名で発表された。(注(5)の表を参照。)
- (8) 1820年代のマルリンスキイの歴史小説は何にもまして、W. スコットの影響を受けていた。当時の読者は、マルリンスキイの小説の馬上擬戦と『アイヴァン・ホー』等のそれとの間に、大きな類似を認めていたようである。
- (9) 対話の場面が心理描写の役割を担っていることに関しては、既に Ф. Канунова の指摘を得ている。従って、ここでは更に、この手法が、他者との対話のみならず、種々のレベルでの対話の場面に現われている点を、具体的に見ておこう。
- (10) 《Он был убит》では別の工夫が見られる。この作品は、戦闘で命を落とした主人公が生前に記した日記の断片によって構成されており、日記の大半は主人公の一方的な語りかけとなっている。その際に、仮想上の対話の相手は様々な他者——愛しいリリア (ты) , 世の詩人達 (ты) , 社交会及び世間一般の人々 (вы) ——であり、そのことによって、日記は主人公の心理描写をより一層効果的に成し遂げている。
- (11) Марлинский. 1958. т. 1, стр. 333.
- (12) このような文脈の中では、語 сердце のみならず、語 душа までもが、時として、грудь の如き形象を帯び始める。
- (13) Марлинский. 1958. т. 1, стр. 136.
- (14) Там же, стр. 316.
- (15) Марлинский. 1958. т. 2, стр. 253.(《Он был убит》より)
- (16) См.: Котляревский Н. Декабристы. С.-Петербург, 1907. стр. 377-390.
- (17) Марлинский. 1958. т. 2, стр. 259.
- (18) Марлинский. 1958. т. 1, стр. 312.
- (19) マルリンスキイの小説の中には、Владимир (《Изменник》), Амалат-бек (《Амалат-бек》), Нармацкий (《Латник》) のように、自らの情熱故に破滅する者達も見られる。
- (20) См.: В.Г. Белинский. Полн. собр. соч. АН СССР, т. 1, стр. 83.
См. также: И.С. Тургенев. Полн. собр. соч. и писем в 28-ми томах. Соч. М.-Л., 1960-1968. т. XIV, стр. 16.
- (21) В.Г. Белинский. Пол. собр. соч. АН СССР, т. 1, стр. 83.
- (22) Там же, стр. 272.
- (23) マルリンスキイ研究に於ては、マルリンスキイと他作家との関係が考慮される中で、ドストエフスキイとの関わりは殆ど取り上げられない。両者の文学の関係については、断片的な

形ではあるが、ドストエフスキイ研究の側で触れられている。(例えば、下記の書)

◇ Terras, V. *The young Dostoevsky (1846-1849)*. Hague, 1969.

◇ Левин Ю.Д. Достоевский и Шекспир. В кн.: Достоевский. Материалы и исследования. т.1. Л., 1974.

◇ Frank, J. *Dostoevsky. The Seeds of Revolt 1821-1849*. New Jersey, 1976.

(24) *l'école frénétique*(普通 非истовая школа と露語訳される)

(25) В.Г. Белинский. Полн.собр.соч. АН СССР, т.Х, стр. 307.

(26) В.Г. Белинский. Полн.собр.соч. АН СССР. т.IV, стр. 42.

(27) В.Г. Белинский. Полн.собр.соч. АН СССР. т.Х, стр. 41.

(28) Там же, стр. 351.

(29) Там же, стр. 313.

猶, 引用文中の「これらの作品」とはフランス熱狂派の文学を意味し, 引用文に先行する箇所, 具体的な作家名として, ユゴー, シュー, デュマ, ジュール・ジャンンが挙げられている。

(30) Ф.М. Достоевский. Полн.собр.соч. в 30 томах. т.1. Л., 1972. стр. 93 -94.

(31) Там же, стр. 270.